

# 篠川事務所の”ホット”通信

2018年12月号

税理士・中小企業診断士 篠川徹太郎事務所

〒226-0003

神奈川県横浜市緑区鴨居 3-1-9-201

電話：045-530-3727 F A X：045-530-3728

<http://shinokawa-office.com>

[mail@shinokawa-office.com](mailto:mail@shinokawa-office.com)



ホットな話題をほっとするような分かりやすさでお伝えする“ホット”通信・・・Vol. 52 をお届けします。  
クレジットカードやコンビニ納付など、税金の納付方法が多様化しています。特にクレカ納付は手数料がかかる一方でポイント還元もあるということで、果たして有利なのか不利なのか？

## 【贈与税や相続税が一切かからない!?】

中小企業の経営者の高齢化が急速に進む中、円滑な代替わりを促すため10年間の特例措置として「事業承継税制」が拡充されました。現行制度では非上場の自社株式を後継者が引き継いだ際に発生する贈与税や相続税が、その後継者や相続人には大きな負担となっていました。そこでその問題を解決し、できるだけスムーズな事業承継を後押しするために、一定の要件のもとで贈与税や相続税の納税が猶予される制度が、2018年度の税制改正によって大きく変わりました。中でも重要なポイントは2つあります。

1つ目は、2023年3月31日までに「特例承継計画」を都道府県庁に提出すると2027年12月31日までに限り、自社株式の贈与や相続の際にかかる贈与税と相続税が一切かからない仕組みになったことです。

2つ目は、雇用の要件が実質的に撤廃されたことです。改正前の制度では納税を猶予されても5年間平均で雇用者数の8割を維持することが義務付けられていました。

それができなければ猶予された贈与税と相続税の全額を納付しなければなりません。しかし、今回の改正により実質的にこの要件が撤廃され、リスクが大幅に軽減されたのです。わずか10年という限られた期間ですが、中小企業の経営者にとっては事業承継について考える絶好のタイミングではないでしょうか。



## 【姿を変えて脚光を浴びる「ポケットベル」】

1990年代に大流行したポケットベルが、姿を変えて脚光を浴びています。災害時に避難情報を伝える防災無線の屋外拡声放送が聞こえにくいことから、ポケベル電波の戸別受信機を導入する自治体が急増しています。ポケベル電波は文字を伝える無線通信で、受信機は情報を音声で読み上げます。建物内に届きやすく受信力の高いポケベル電波は、高額な屋外アンテナが不要で整備の費用も抑えられます。自然災害が相次ぐ日本列島で住民の命を守るアイテムに変貌です。



## 今月の教えてキーワード：【ESG投資】

Environment (環境)・Social (社会)・Governance (企業統治)に配慮している企業を選別して投資すること。  
地球温暖化、生物多様性の保護、人権や地域貢献、法令遵守、情報開示などへの取り組みを重視する。  
企業の長期的な成長のためにはESGの観点が必要という概念が世界的に広まりつつあり、取り組みが不十分とみなされれば資金を引き上げる動きもある。東京五輪を前に世界の投資家は日本企業にも厳しい目を向けている。

## 【「外れる」勇氣】

四季折々で表情を変える美しい自然の風景は、日本の魅力として世界に広く知られています。けれどこの夏は、アフリカから来た観光客に「日本のほうが暑い！」と言わせるほどの猛暑でした。天候でも植物の生育でも生き物の生態でも「季節外れ」という言葉が「異常」の代名詞にもなっている現代ですが、昔の日本には季節外れを受け入れる風流がありました。



例えば、俳句の季語では時節を過ぎて鳴く虫の音を「忘れ音」といいます。時節が過ぎ去ってから咲く花は「忘れ花」。返り咲きした花は「返り花」。春半ばの降りじまいの雪は「雪の果」「忘れ雪」「別れ雪」「涅槃雪(ねはんゆき)」

など情緒たっぷりに表現されます。歌人にとっての季節外れは異常ではなく、風情や個性なのでしょう。

「外れる」という言葉には「予測や期待と違う結果になる」「通常の基準に合わなくなる」「一定の枠や基準を超える」という意味もあります。「一億総中流社会」に象徴された昭和から「多様化」の平成になり、多様化という言葉さえすでに古いと感じるくらい価値観が枝分かれして複雑になりました。凝り固まった価値観やルールからの脱却を「さよなら、おっさん」と表現した広告が賛否両論を呼んだのは記憶に新しいところ。「個」の時代がますます加速していくと言われる今、外れること自体が価値を創造していくようにも感じます。しかし、長年商売をしていると、変化を求めながらも外れることを避けようとするのはよくあることです。

口では「変わりたい」と言いながら、実は今に甘んじていたいという気持ちは、ごく一般的な心理でしょう。それでも私たちは、外れた事象を受け入れる遺伝子を受け継いでいます。しかも「激動の昭和」と「多様性の平成」の両方を経験している世代は、故(ふる)きを温(たず)ねて新しきを知るバランス感覚も持ち合わせているのではないかと思います。人によっては3つの年号をまたいで商売をしていく人もいるでしょう。過去にとらわれず「外れる」勇氣を持って新しい時代に望みたいものですね。

誰だって人から  
尊敬されたいものよ

今を生きる！

## 先人の言葉

アメリカの黒人女性ソウル歌手であるアレサ・フランクリンの言葉。差別を経験してきた人だからこそ、リスペクトされることの大切さが実感をもって語られ歌われています。

## 【猟師の肉は腐らない】

発酵学者で文筆家である小泉先生が渋谷の飲み屋で知り合った義しゃんを八溝の山奥に訪ね、めくるめくマタギの生活を体験します。小泉先生の蘊蓄の深さに感嘆すると共に、改めて食することについて深く考えさせられる小説です。

